

その他

「玉臺新詠序」訳注（九）

○鎌田 出*1 藤本陽子*1

例言

- 一、本稿は、許榘評選・黎經誥箋注『六朝文絜箋注』（巻8）所収「玉臺新詠序」本文および箋注部分の訳注である。
- 二、底本には、中華書局出版（1962 第1版上海第1次印刷）『六朝文絜箋注』を用いた。
- 三、原文中の引用書に関しては、原典との対照を行い、必要と思われる文字校訂を加えた。校訂を加えた箇所については、語釈または補注で言及した。
- 四、全体は①原文、②語釈、③通釈、④補注よりなる。
- 五、訳注作成にあたり、原則として引用文も含め新漢字を使用した。但し、「弁」（辯・辨）のように意味上の混乱を生じる場合など、部分的に新漢字を用いなかった箇所もある。
- 六、閲覧の便を図るため、原文およびその通釈部分はゴチック表記とした。

①原文

雖非図画、入甘泉而不分；漢外戚伝：李夫人少而早卒、武帝憐憫焉、図画其形於甘泉宮。

②語釈

○「図画」…絵画。ここでは漢の武帝が亡くなった李夫人の肖像画を描かせた故事を踏まえる。漢代の絵画には壁画、画像石、画像磚、帛画があるが、後述「漢外戚伝」『漢書』（巻97）の「孝武李夫人伝」に「李夫人少而蚤卒、上憐憫焉、図画其形於甘泉宮」とある。『論衡』（巻13「別通編」）に「人好観図画者、図上所画、古之列人也（中略）古賢之遺文竹帛之所載燦然。豈徒墻壁之画哉。」とあ

り、死者である李夫人の肖像画は壁画であったと考えられる。

なお、角谷常子「後漢時代における為政者による顕彰」（奈良大学史学会『奈良史学』26号2008）は、漢代人は絵画に勸戒を目的としていたが（後述語釈「傾国傾城」も参照）、武帝期に生死を問わず顕彰目的にもなったと述べている。その例として、『漢書』（巻68「金日磾伝」）を引き、李夫人同様、武帝が金日磾の母の肖像画を甘泉宮に掲げていることを挙げる。

○「甘泉」…甘泉宮。陝西省咸陽の甘泉山にあった離宮で、秦の始皇帝が林光宮として造営し、漢の武帝が増築した。『玉台新詠』には王筠の「遊望二首 其二」（巻8）に「甘泉宮」が詠み込まれている。補注参照

○「不分」…違わない。「分」は「分別（区別する）」の意。次の「無別」と対をなす。

○「漢外戚伝」…『漢書』（巻97）の李夫人伝。「李夫人少而蚤卒、上憐憫焉、図画其形於甘泉宮」とある。『太平御覧』（巻136「皇親部」）の「孝武李夫人」に、ほぼ同一の記述がある。『漢書』原文には「上」とあるが呉兆宜注では「武帝」と補う。

○「李夫人」…武帝の側室の一人。もともとは楽人で、武帝に仕えた楽人である兄の李延年在「北方有佳人、絶世而独立、一顧傾人城、再顧傾人国。寧不知傾城与傾国、佳人難再得」（『漢書』李夫人伝）と歌ったことでその存在を平陽公主を通じて武帝に知られることとなり、側室となった。男児を一人もうけ、その男児は昌邑哀王となる。兄は李延年のほかにも武人として武帝に使えた李広利がいる。

*1 至誠館大学 現代社会学部

李夫人の容姿については、『漢書』の李夫人伝に「実妙麗善舞」とある。李夫人の死後も武帝は彼女のことが忘れられず、方士に彼女の魂を呼び戻させている。なお、この「返魂」について張小鋼『返魂香』考——『李夫人』との関係をめぐって（『金城学院大学論集』11 巻 2 号 2015）は『史記』と比較し、「班固が『史記』における王夫人の内容を李夫人の方にすりかえた」と指摘している。

- 「武帝」…前漢 7 代皇帝、劉徹。在位期間は 141～87BC。「武帝紀」（『漢書』巻 6）に「景帝中子也、母曰王夫人。年四歳立為膠東王。七歳為皇太子、母為皇后。十六歳、後三年正月、景帝崩。甲子、太子即皇帝位」とある。

③通釈

武帝が描かせた肖像画の李夫人ではないが、甘泉宮に入れる美しさと遜色はなく 『漢書』外戚伝に、「李夫人が若くして亡くなり、武帝は喪失感に打ちひしがれて、その姿を甘泉宮に描かせた」とある。

④補注 1 「甘泉宮」について

甘泉宮にはいくつかの役割が見られる。渡辺信一郎（『中国古代の樂制と国家 日本雅樂の源流』図書出版文理閣 2013）によれば、「避暑地」であり「宮都」であり、「特別な祭祀空間」であり、「政治空間」であるという。「特別な祭祀空間」である理由として渡辺は、宮城内に「神人の到来を祈念した益寿館・延寿館、天神との交感を願って通天台を建造し」たこと、宮城外に設けられた甘泉泰畤は「方士たちが黄帝の都城であったと言う伝説を吹聴した」ことを挙げている。

このような機能を持っていた空間であったことから、亡くなった李夫人を方士が呼び出す場ともなったのであろう。『漢書』（巻 22「礼楽志」）に「至武帝定郊祀之礼、祠太一於甘泉、就乾位也」とあるよ

うに、甘泉宮は太一神（天）を祀る場となっている。また、「甘泉」と対をなす次句の「陽台」も神仙につながる場所である。なお、語釈に挙げた「有望二首其二」には、「自陳心所思、獻賦甘泉宮」と、「甘泉賦」に倣い甘泉宮が祈願の場として詠まれている。

①原文

言異神仙、戲陽台而無別。 宋玉高唐賦：昔者先王嘗遊高唐、怠而昼寢。夢見一婦人曰：妾巫山之女也。為高唐之客。聞君遊高唐、願薦枕席。王因幸之。去而辭曰：妾在巫山之陽、高丘之岨、旦為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮、陽台之下。

②語釈

○「陽台」…南にあるうてな。「陽」は、山の南側、また川や湖の北側のこと。ここでは「陽（雲）台」を言う。「高唐賦」（『文選』巻 19）の序に「妾在巫山之陽、高丘之岨。旦為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮陽台之下」とあり、転じて男女が同衾するという意味が付された。『玉台新詠』には王融の「雜詩五首 巫山高」（巻 4）に「想象巫山高、薄暮陽台曲」、江淹の「古四首 休上人怨別」（巻 5）に「相思巫山渚、帳望雲陽台」（呉注に「雲陽、一作陽雲」とある）、費昶の「巫山高」（巻 6）に「巫山光欲晚、陽台色依依」と詠まれ、いずれも「巫山」と共起する。

○「高唐賦」…楚の宋玉の賦。宋玉が楚の襄王に、先代の懐王が高唐で夢の中で出会った神女について物語る。引用文は『文選』と同文であるが、他に以下のような文字の異同が認められるものがある。『芸文類聚』（巻 79「靈異部下」）は「昔者先王嘗遊高唐、怠而昼寢。夢婦人曰、妾巫山之女也。為高唐之客。聞君遊高唐。願薦枕席。王因幸之。去辭曰、妾在巫山之陽、高丘之阻、旦為朝雲、暮為行雨。朝朝暮暮、陽台之下」、また『太平御覽』

(巻8「天部八 雲」)に引く該当箇所は「昔者先王嘗遊高唐、殆而昼寢。夢婦人曰、妾巫山之女也。為高唐之客。聞君遊高唐。願薦枕席。王因幸之。去辭曰、妾在巫山之陽、高丘之岨、旦為朝雲、暮為行雨。朝朝暮暮、陽台之下」(下線は筆者による)とする。

- 「遊」…狩猟をする。『戦国策』(巻14)に「是於、楚王游雲夢、結駟千乘、旌旗蔽日、野火之起也若雲蜺(中略)樂矣、今日之游也。」とある。次項の「高唐」にもあるように、雲夢での「遊」は祭祀としての狩猟と考えられる。
- 「高唐」…楚の雲夢沢にあった台館。雲夢沢は現在の湖北省から湖南省にあった中国史上最大の湿地の一つであったが、後に多数の湖に分かれている。田島花野(「招魂儀礼の空間と時間—『楚辞』招魂篇の乱辞を中心に—」『集刊東洋学』96号2006)は、雲夢沢は、「楚王の狩猟地であり、楚の国家的な祭祀の場であり、男女が集まり歌垣を行う場所でもあった。雲夢沢での楚王の狩猟は、祭祀の意味合いを持っていた」、また「高唐賦」を引いて、「楚王が行う狩猟や神女との神婚が、王の心身を活性化させ、長寿を促す生者招魂と深く関わる」ものとする。

このように「高唐」のあった雲夢沢は、先述の「甘泉宮」同様祭祀の場となっており、死者である李夫人の招魂と、神婚による招魂が間接的に対になっていると言える。

- 「怠」…疲れる。なお前出『太平御覧』では「殆」につくり、「殆」はこれ以上動けば死に至る状態の意となる。
- 「先王」…先代の王。楚の懷王(襄王は長子)。「高唐賦」の李善注に『襄陽耆旧伝』を引いて「楚懷王遊於高唐、昼寢夢見与神女遇、自称巫山之女」とある。
- 「巫山」…重慶市巫山県と湖北省の境にある山。『玉台新詠』の中では、前出の「陽台」と共起し

た詩以外に、王融「遊禽暮知反」(巻4)に「巫山彩雲没、淇上緑條稀」、沈約「夢見美人」(巻5)に「既薦巫山枕、又奉齊眉色」、何思澄「南羨逢美人 其一」(巻6)に「洛浦疑廻雪、巫山似旦雲、傾城今始見、傾国昔曾聞」、劉綏「雜詩四首」(巻8)に「不信巫山女、不信洛川神、何関別有物、還是傾城人」、張載「擬四愁詩四首 其一」(巻9)に「我所思兮在南巢、欲往從之巫山高」と詠み込まれている。

「陽台」と共起する「巫山」だが、「巫山」が「雲」、「美人」、「枕」といった語とともに詠まれる場合、「高唐賦」を踏まえていると言える。一方、上に挙げた張載「擬四愁詩四首」はこれらの語を含まず、思慕を詠っている。遠藤星希「楽府文学史上における李賀の位置—『巫山高』に基づく考察—」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第8号2005)は、「『巫山高』の古辞は、蜀地に在る旅人の旅愁を主題とする」のに対し、後世は「高唐賦」を踏まえた「神女伝説が織り込まれている」、また「神女の化身としての、こうした雲や雨は、六朝唐代を通じての『巫山高』にはほぼ欠かさず詠み込まれている」と述べている。そうであれば、本来の巫山を詠み込んだ張載の詩は、潮流としては稀なものと言える。

ちなみにこの時代的な変化について、谷口洋(『作者』宋玉の誕生—漢魏六朝における『作者』意識『六朝学術学会会報』巻16 2015)は、風論としての賦の失墜と、前漢末に楚の亡国の臣であった宋玉が楊雄により「漢賦の系譜の直接の祖先」としての地位を得、「漢代の賦家に影響を与えた『作者』として規定され、建安になり「曹植が『洛神賦』の女で宋玉の神女に言及し(中略)宋玉のテキストが、自らの作品の題材として明確に意識されるようにな」ったと説明する。また松浦史子「江淹『瑤草』考—郭璞「畝(正しくは「草かんむり」を加える)草」の継承と展開—」(『東

洋文化研究所紀要』巻155 2009）は、「劉宋末から梁にかけては、儒家的掣肘を斥け、艶冶な宮体詩が盛行した時期である」と述べている。以上のことから、詠まれる対象としての「巫山」の意味の時代的变化を見ることができるだろう。

- 「巫山之女」…巫山の娘。前出松浦史子論文は、江淹「別賦」（『文選』巻16）の李善注が引く「高唐賦」から、「①帝の娘で「瑤姬」と呼ばれ、②未婚にして死に巫山に葬られ、③その精魂が草となり実は靈芝となった」と述べ、さらに袁珂の「高唐賦」が『山海経』の「崑崙（「草かんむり」を加える）草」神話から発展したものという1979年の説が通説になっていると紹介している。なお、②に関しては潘黄門「岳」（『文選』巻31）の李善注に「宋玉集云、楚襄王与宋玉遊於雲夢之野望朝雲之館有気焉（中略）昼寝夢見婦人自云、我帝之季女名曰瑤姬」とある。

森雅子『神女列伝 比較神話学試論2』（慶應義塾大学出版会 2013）は、中国における女神を分類し、巫山の女を「聖婚の花嫁」に位置づけている。この「聖婚の花嫁」は「女性のほうが男性より身分が高く（中略）女性による積極的な求愛・求婚で始まり、しかもその一方的な献身と援助により物質的幸運や繁栄」がもたらされるというものである。「高唐賦」において、雲や雨という言葉の共起は、農耕時代における豊穡の女神であることが分かったと述べている。これらの注をまとめれば、楚の懷王は、雲夢で狩猟を祭祀として行い高唐で巫山の女神によって祝福を受けたということである。

なお、巫山の神女の美しさは、「高唐賦」にはないが、宋玉「神女賦」に形容されている。

- 「薦枕席」…「薦」は、李善注に「薦進也」とある。「枕席」は枕と褥で寝具を言う。同衾して契りを結ぶことを求める。李善注は「欲親於枕席親昵之意也」とする。

- 「幸」…神女の願いを聞き入れ、情を結ぶ。

③通釈

神仙とは異なると言っても、陽台で戯れるかの美しい神女と区別がつかない。宋玉の高唐賦に、「昔先代の王が高唐に狩猟に行き、疲れて昼寝をしていた。夢に一人の女性が出てきて「私は巫山の女です。高唐へ客として来ています。あなたが高唐に狩猟にいらしていると聞き、私と褥をともにすることを願います。」王は彼女を寵愛した。彼女は去るときに言った。「私は巫山の南側の険しい斜面で、朝は朝にたなびく雲となり、夕暮れに雨となって、朝な夕な陽台のもとにいます」とある。

①原文

真可謂傾国傾城、漢李延年歌：傾城復傾国、佳人難再得。無對無双者也。古詩為焦仲卿妻作：精妙世無双。

②語釈

- 「傾国傾城」…国が傾くほど、都市が傾くほど人々が熱狂的に慕う。補注参照

- 「漢」…ここでは前漢（206BC～8AD）のこと

- 「李延年歌」…「李延年」は中山の人で、武帝に仕えた楽人。前出李夫人の兄で、将軍となった李広利は兄。『漢書』（巻22）の「礼楽志」に「乃立楽府、采詩夜誦、有趙、代、秦、楚之謳。以李延年为協律都尉、多举司馬相如等数十人造為詩賦、略論律呂、以合八音之調、作十九章之歌」とあり、李延年が協律都尉の創始とされる。また『史記』（巻125）に李延年伝を載せる。「玉臺新詠訳注（五）」の「弟兄」以下の項も参照のこと。

「歌」は、『玉台新詠』（巻1）に「歌詩一首並序」として所収され、全文は「北方有佳人、絶世而独立、一顧傾人城、再顧傾人国、傾城復傾国、

佳人難再得。『漢書』(巻97)「孝武李夫人」にも「歌曰」として引かれるが、「寧不知傾城与傾国」と「寧不知」の三字が挿入されており、また「復」を「与」に作る。『樂府詩集』(巻84)には「李延年歌」の題で引かれ、『漢書』所収のものと文字の異同はない。

- 「無対無双」…くらべるものがないほど優れている。稻香楼本の注に「一作無双無対」とある。「無対無双」および「無双無対」という四字の初出か。なお、『玉台新詠』において「無対」が現れるのは「序」だけである。

- 「無双」…稻香楼本は注に張衡「定情賦」の「冠朋匹而無双」を引くが、『芸文類聚』(巻18「美婦人」)に引く後漢張衡「定情賦」に、「夫何妖女之淑麗、光華艷而秀容、斷當時而呈美、冠朋匹而無双」とある。また宋玉「神女賦」(『文選』巻19)に「其象無双、其美無極」とある。

『玉台新詠』では注に引く「古詩為焦仲卿妻作」に「窈窕世無双」、謝惠連「七月七日夜詠牛女」(巻3)に「今衆夕無双」、「歌辭二首 其一(東飛伯勞西飛燕)」(巻9)に「窈窕無双顔如玉」とある。「窈窕世無双」について、稻香楼本は注に『韓信伝』(『史記』巻92「淮陰侯韓信」)の「如信国土無双」(ただし「如信者国土無双」)、「窈窕無双顔如玉」は既出の「窈窕世無双」を引く。また、宋玉「神女賦」(『文選』巻19)にも「其象無双、其美無極」とある。

- 「古詩為焦仲卿妻作」…魏・晋時代の作と考えられる樂府体詩。『玉台新詠』(巻1)に所収される。詩冒頭の「孔雀東南飛」から「孔雀東南飛」とも呼ばれる。作者の名はなく、序に「漢末建安中、廬江府小吏、焦中卿妻劉氏、為中卿母所、遣自誓不嫁」とあることから後漢末におきたことを誰かが詠んだものであると考えられている。なお、妻劉氏とは詩の中に登場する劉蘭芝のこと。

- 「精妙世無双」…「古詩為焦仲卿妻作」では、前

に「纖纖作細歩」とあり、歩き方の美しさは並ぶ者がないと詠んでいる。

この箇所は既出の焦仲卿の妻、劉蘭芝が離縁され婚家を立つ日の様子が詠まれているが、松家裕子「陌上桑」をめぐって(『中国文學報』第39冊 1988)は、この離別の朝に劉蘭芝の美しさが描かれているのは、当時の風習、つまり「離縁された女性は、嫁いで来た時そのままのかっこうで婚家を出ることになって」おり、「花嫁のさまそのもの」であるとする。

③通釈

まさに傾国傾城、前漢の李延年の歌に、「街の人々、国の人々が熱狂的に慕う美女であり、再び得ることは難しい」とある。比べるものがないほど美しい。古詩「為焦仲卿妻作」に、「美しさは2つとない」とある。

④補注2 「傾国傾城」について

『玉台新詠』に載せる「傾国」「傾城」が詠み込まれた詩は、注に引く李延年の歌および何思澄「南羨逢美人」(巻6)「洛浦疑廻雪、巫山似旦雲、傾城今始見、傾国昔曾聞」、皇太子簡文「率爾為詠」(巻7)「借問仙將画、詎有此佳人、傾城且傾国、如雨復如神」の3首がある。李延年の詩は「傾国傾城」の順になっており、何思澄の詩は「傾城」「傾国」が2つの句に分かれ美女を指す。皇太子簡文のこの詩は李延年の詩を基に1つの句に傾城および傾国が入っており李延年同様美人の程度を表すが順番が異なる。但し他の時代のものを見ても「傾城傾国」とあり李延年の「傾国傾城」は稀。

なお、この3首以外に「傾国」が詠み込まれている詩はなく、また「傾国」が単独で(「傾城」なしに)詠み込まれている詩もない。『玉台新詠』の時期においては「傾国」のみで美女を表現はしなかったものと考えられる。なお、『晏子春秋』(内篇「諫上」)に

「晏子辞曰、君命其臣、拋其肩以尽其力、臣敢不勉乎、今有之家、此一国之権臣也、人人以君命命之曰、將以而所伝為子、此離樹別当、傾国之道也、嬰不敢受命、願君図之」とあり、これが初出か。意味としては亡国である。

いっぽう「傾城」のみが詠み込まれている詩として、『玉台新詠』には、阮籍「詠懷詩二首」（巻2）に「傾城迷下蔡、容好結中腸」、陸機「擬西北有高楼」（巻3）に「玉容誰能顧、傾城在一彈」、顔延之「秋胡詩一首」（巻4）に「傾城誰不顧、弭節停中阿」、王僧孺「見貴者初迎盛姫聊為之詠」（巻6）に「久想專房麗、未見傾城者」、梁武帝「紫蘭始萌」（巻7）に「二遊何足懷、一顧非傾城」、劉緩「敬劉長史詠名士悦傾城」（巻8）「不信巫山女、不信洛川神、何関別有物、還是傾城人」と6首あり、詩題だけのものとしては、皇太子「和湘東王名士悦傾城」（巻7）がある。このうち陸機「擬西北有高楼」を除いた5首は美女を指す。ただしその美女は神女である場合と、一般的な美女である場合とがある。

『詩経』（大雅「瞻卬」）に「哲夫成城、哲婦傾城」とあり、これが初出か。ただしこの時代では、哲婦は美女ではなく賢い婦人のこと。白川静（『詩経』中央公論社中公新書1970）は、「哲婦」を「小賢い婦人」とし、「当時の定論であった」「国政を左右するほどの婦人」であり周の滅亡を招いた褒姒とする。後漢『越絶書』（巻9）「越絶外伝計倪第11」に「乃有禍晋之驪姫、亡周之褒姒、尽妖妍於図画、極凶悖於人理、傾城傾国、思昭示於後王」とある。驪姫も褒姒も国に災いをもたらした、あるいは国を滅ぼすことになった悪女として名高く、「図画」の項に記述したように図画に描かれるものは勸戒のためであることも考慮すれば、ここでの意味は亡国の勸戒であり、人々が熱狂的になるという意味はなく、また美人を形容する言葉でもない。

しかし、同書内経九術に「胥聞賢士邦之宝也、美女邦之咎也、夏亡於妹喜、殷亡於妲己、周亡於褒姒」

とあり、「傾城」ではないが「邦の咎」としての美女に褒姒が引かれ、間接的に「傾城傾国」と美女のつながりを見ることができるともいえよう。

時代が下り、後漢の張衡『西京賦』（『文選』巻2）には「昭邈流盼、一顧傾城」とあり、美人を形容する言葉として確立していることがわかる。また後漢以降では、魏の阮籍「詠懷詩」に「傾城思一顧、遺視來相誇」（第27首）、「色容艷姿美、光華輝傾城」（第75首）、晋の陶淵明「閑情賦」に「表傾城之艷色、期有徳於伝聞」、斉の沈約「日出東南隅行」に「中有傾城艷、顧景織羅紈」、梁の殷芸「詠舞詩」に「方知難再得、所以遂傾城」のように美女を指す「傾城」は単独で詠み込まれる例が見つけられるが、やはり「傾国」のみで詠み込まれるものは見つけられない。

①原文

加以天情一作情、開朗、逸思彫華、妙解文章、尤工詩賦。

②語釈

○「天情」…人のさまざまな思い。自然な感情。『荀子』（巻11「天論」）に「好悪喜怒哀楽蔵焉、夫是之謂天情」とある。福井佳夫「六朝の文学用語に関する一考察：『縁情』を中心に」（『中国中世文学研究』63-64 2014）は、六朝の「情」について「基本的な『思い』の意味あいはいはかわらないものの、『儒家の礼にかなった』のニュアンスがうしなわれ、多様な『思い』いつさいがふくまれるようになった」と述べる。

なお、石川忠久（『玉台新詠』学習研究社）は「天性」と訳し、内田泉之助（『玉台新詠』明治書院）は「天資・天性という程の意」とする。

○「一作晴」…稻香楼本は「天時一作精」に作る。中国古典文学基本叢書『玉臺新詠箋注』（中華書局1985）も「天時一作精」とし、光緒3（1877）年版の『六朝文絜』は「天時一作晴」に作る。「情」

は、『六朝文絜』独特の文字異同の可能性がある。
「天晴」は晴れていること。「天精」は天の精気。
いずれも旁は「青」で音が共通する。

- 「開朗」…明るい。『晋書』(巻57「列伝」)に「奮性開朗、有筹略、少好武事」とある。また、すがすがしい。『世説新語』(「言語」)に「服五石散、非唯治病、亦覺神明開朗」とある。なお『玉台新詠』にはこの語が詠み込まれた詩はない。

石川忠久(『玉台新詠』学習研究社)は「賢明さ」と訳し、内田泉之助(『玉台新詠』明治書院)は「心がうち開けて賢明なるをいったものと思われる」とする。

- 「逸思」…自由な思想。沈約「棋品序」(『藝文類聚』巻74「工芸部」「囲棋」)に「是以漢魏名賢、高品間出、晋宋盛士、逸思争流。」とある。囲棋とは囲碁のこと。

石川忠久(『玉台新詠』学習研究社)は「すぐれた才」と訳し、内田泉之助(『玉台新詠』明治書院)は「逸思彫華」で「俊逸の才藻あるのをいった」とする。

- 「彫華」…技巧が凝らされた華やかな詩。『芸文類聚』(巻41)の「宋謝恵連善哉行」に「陰灌陽藂、彫華墜萼」とある。

「稻香楼本および徐孝穆箋注には「彫華」とつくる。「彫」は「彫」の異体字。浅見洋二『詩中有画』と『著壁成絵』—中国における詩と絵画—(『日本中国学会報』(第50集1998)は、「彫」を含む語として「彫画」、「彫龍(文心彫龍)」、「彫藂」、「彫采」、「彫飾」などを挙げ、六朝時代に「彫」を含む語が文章の修辞技巧を凝らすことを表して数多く用いられている」という。なお、山崎みどり「“花”と“華”—詩的イメージの差異をめぐって—」(『中国詩文論叢』第2集1983)は、六朝時代以前には「花」の字は現れない字であり、「華」には「より抽象度の高い語としてとらえることができるだろう」とする。

『芸文類聚』(巻74)の引く蔡邕「彈碁賦」に「於是列象碁、雕華麗」とある。彈碁は彈棋とも書く。彈碁とは漢代から唐代まで遊ばれた遊戯のこと。

「彈碁賦」では象牙の駒の細工の華やかさを言う。『玉台新詠』に所収されていないが、蔡邕をはじめ曹丕等は「彈棋賦」を詠んでいる。

文学的には六朝時代の「礼」から自由になった技巧的な表現を象徴するものと考えられるが、『玉台新詠』のなかにこの語が詠み込まれた詩はない。

- 「尤」…特にすぐれることを表す。

③通釈

そのうえ、さまざまな自然な思い(別本では晴とする)がうち開き、自由な思想は技巧をこらして華やかに詠い、文章の理解は絶妙で、とりわけすぐれた詩賦をつくる。

(以上、藤本)

①原文

琉璃硯匣、終日隨身；陸雲与兄平原書：常案行並視曹公器物、書刀五枚、琉璃筆一枝。

②語釈

- 「琉璃」…青色の宝玉。四部備要本『徐孝穆集箋注』(巻4)も「琉璃」に作る。『玉台新詠箋注』は「瑠璃」に作る。「瑠」は「琉」に同じ。

- 「硯匣」…硯箱。「匣」は、蓋のついた四角の箱。

- 「陸雲」…西晋の文人(262～303)。兄の陸機とともに「二陸」と称された。

- 「与兄平原書」…『全晋文』(巻102)所収。四部叢刊本『陸士龍文集』(巻8)では「与平原書」の題で所収され、引用部分には途中に省略がある。

『太平御覽』(巻31「時序部」)の「七月七日」には「(周処『風土記』)又曰、陸雲与兄平原書曰、一日按視曹公器物、書刀五枚、^{ママ}琉璃筆一枝」とあ

り、途中に省略が無い。

- 「常」…『陸士龍文集』『全晋文』はいずれも「一日」に作る。『徐孝穆集箋注』の呉兆宜注には「〔陸機書〕在平日常案行」とある。
- 「案行」…見回る。『世説新語』（巻中「賞誉」）に「丞相治廨舍、按行而言曰」とある。「按」は「案」に同じ。
- 「曹公」…三国魏の太祖武帝曹操（155～220）。
- 「書刀」…木簡竹簡の文字を削り取る際に用いる刀。
- 「枝」…『陸士龍文集』は「枚」に作る。

③通釈

瑠璃の硯箱は、一日中肌身離さず、陸雲の「兄平原に与うる書」に、「常に見回り、曹公が使われた道具をすべて見ると、書刀が五挺、宝玉の筆が一本」とある。

①原文

翡翠筆牀、無時離手；芸文類聚：傅玄曰、漢末一筆之匣、綴以隋珠、文以翡翠。樹萱録：梁簡文製筆牀、以四管為一牀。**補** 東宮旧事：皇太子初拜、給漆筆四枝、銅博山筆牀一副。

②語釈

- 「翡翠」…翠青色の硬玉。謝朓「落梅」（『玉台新詠』巻4）に「用持挿雲髻、翡翠比光輝」とある。
- 「筆牀」…筆掛け。「牀」は、細長い台を言う。
- 「芸文類聚」…唐・欧陽脩らが編纂した類書。引用箇所は、「筆」（巻58）に「伝子曰、漢末、一筆之押、雕以黄金、飾以和璧、綴以随珠、発以翡翠。」とあり、「伝」字に「太平御覧六百零五作傳」の注がある。『太平御覧』（巻605）の該当箇所には「傳子曰、漢末、一筆之匣、雕以黄金、飾以和璧、綴以隋珠、文以翡翠。」とある。

- 「傅玄」…西晋の政治家（217～278）で、武帝に諫官として仕えた。著作に『傅子』がある。『芸文類聚』が「傅子」を「伝（傳）子」に誤っていたものを、呉兆宜が著者の「傅玄」に改めたものと思われる。

- 「隋珠」…「和氏の璧」と並び称される宝玉。『淮南子鴻烈』（巻6「覽冥訓」）に「譬如随之珠、和氏之璧」とある。「随」は、現在の湖北省隨州一帯を指し、楊堅（541～604）が「𪛗（しんにょう）」を削り国名とした。

- 「樹萱録」…唐末の志怪小説。『駢字類編』（巻162「筆牀」）に「**樹萱録**梁簡文製——以四管為一牀」とある。『説郛』（写32）に唐・劉燾の著書として所収されるが、引用部分は見当たらない。宋・曾慥『類説』（巻13）所収の『樹萱録』には、「梁簡文答徐摛書、時設書幌、乍置筆牀、四管為一牀也。」とある。また、『樹萱録』ではないが、知不足齋叢書所収の宋・趙令時『侯鯖録』（巻1）に「筆為双、為牀、為枚。南朝呼筆四管為一牀。梁簡文答徐摛書：時設書幌、中置筆牀。」と同様の内容がある。

- 「梁簡文」…南朝梁の2代皇帝蕭綱（503～551）。
- 「以四管為一牀」…筆四本が架かる筆掛けを「一牀」と呼んだ。前出「樹萱録」注の『侯鯖録』参照。

- 「**補**」…以下、黎経誥の注であることを示す。
- 「東宮旧事」…『説郛』（写59）に晋・張敞の著書として所収し、「皇太子初拜、給漆筆四十枚、銅博山筆牀一副。」とある。また、『太平御覧』（巻605「筆」）に引く『東宮旧事』に「皇太子初拜、給漆筆四枚、銅博山筆牀一副。」とあり、『芸文類聚』（巻58「筆」）も同一文。「博」は「博」の異体字。
- 「銅博山」…銅製の博山。「博山」は、山を象った装飾。

③通釈

翡翠の筆掛けは、片時も手放さない。『芸文類聚』

に「傳玄が言うには、漢末、一箱の筆入れがあり、随侯の宝玉と翡翠で飾り付けられていた」とある。『樹萱録』に「梁の簡文帝が筆掛けを作らせ、筆四本が架かるものを一牀とした」とある。黎経誥の注に、『東宮旧事』に「皇太子が初めて即位すると、漆の筆四本、銅製の博山の筆掛け一副を賜る」とある。

①原文

清文満篋、非惟芍薬之花；傳統妻芍薬花頌：曄曄芍薬、植此前庭。晨潤甘露、昼晞陽靈。梁武帝宛轉歌；欲題芍薬詩不成。

②語釈

○「清文」…冗漫でない詩文。新釈漢文大系の「語釈」に『清文』は下句と対して、『清・新』を分用した」とあり、「清高」と訳すが、『文心彫龍』（巻7「鎔裁」）に「而称清新相接、不以為病、蓋崇友于耳」とあるように、「分用」ではなく、それぞれ独立した概念と捉えるべきであろう。ここでは、佐藤利行「二陸の文章制作について—陸雲『与兄平原書』を中心に—」（『中国中世文学研究』17号 1984）の「清」に関する『清省』なる文章、言い換えれば『繁』ではないもの」という解釈に従った。

- 「篋」…文を入れる小箱。
- 「非惟」…累加表現。「芍薬之花」に、以下の「葡萄之樹」を累加する。
- 「芍薬」…ボタン科の多年草。牡丹が「花王」と呼ばれるのに対して「花相」と呼ばれる（『本草綱目』牡丹）。『毛詩』（鄭風「溱洧」）に「維士与女、伊其將諠、贈之以勺薬」とあり、男女の情愛を想起させる花。
- 「傳統妻」…散騎常侍の傳統の妻、辛蕭。『全晋文』（巻144）に「（辛）蕭、散騎常侍傳統妻」とある。
- 「芍薬花頌」…『芸文類聚』（巻81「芍薬」）に載

せ、また『全晋文』にも載せるが、引用との間に文字及び文字数の異同がある。新釈漢文大系は「語釈」に「今は佚して伝わらず、僅かに『傳統伝』に『煜煜たる芍薬、此の前庭に植う。晨には甘露に潤い、昼は陽靈に晞（かは）く』の四句だけがのこっている。」と記すが『晋書』に「傳統伝」は見当たらず、『芸文類聚』及び『全晋文』所収のものはともに20句よりなる。あわせて「補注」参照。

- 「曄曄」…明るく輝く様。
- 「甘露」…天と地が合体して降らせる美味しい露。『老子』（32章）に、「天地相合以降甘露」とある。
- 「陽靈」…皇帝が天を祀る場所。ここでは太陽を言う。揚雄「甘泉賦」（『文選』巻7）に「相与齐乎陽靈之宮」とあり、李善の注に「祭天之所、故曰陽靈」とある。
- 「梁武帝」…南朝梁を建国した蕭衍（464～549）。
- 「宛轉歌」…梁・武帝ではなく、陳・江總（519～594）の楽府。『樂府詩集』（巻60）に引く陳・江總の「宛轉歌」に「欲題芍薬詩不成、来采芙蓉花已散」とある。

③通釈

引き締まった詩文は文箱に溢れ、美しい芍薬の花のようであるばかりでなく、傳統の妻蕭辛の「芍薬花頌」に「明るく輝く芍薬は、前庭に植えよう。朝には甘天の降らせる甘露に潤い、昼には太陽の陽射しを浴びて乾く」とある。梁武帝（※正しくは、陳の江總）の「宛轉歌」に「芍薬の詩を書きつけようとしたが完成しなかった」とある。

①原文

新製連篇、寧止蒲萄之樹。 未詳。

②語釈

- 「新製」…新しい趣を持った作品。「製」は、「清

文」の「文」に対応して詩文を言う。前出佐藤氏論文は、「新奇」「新声」について「これまで見られなかった表現の新鮮さ、人々の思いもつかなかった発想を含むことば」とする。

○「寧」…反語を表す副詞。累加表現「非惟」に対応する否定詞の代わりに用いる。

○「蒲萄之樹」…「蒲萄」は「葡萄」に同じ。西域に産する果実で、酒の原材料となる。『後漢書』（巻118「栗弋伝」）に「蒲萄衆果、其土水美、故蒲萄酒特有名焉」とある。また、『史記』（巻123「大宛伝」）に「（大）宛左右以蒲陶為酒」とある。「蒲陶」は「葡萄」に同じ。「補注」参照。

○「未詳」…詳しいことはまだわからない。『徐孝穆集箋注』（巻4）の呉兆宜注に同じ。

③通釈

新しい趣を持った作品ともども、遠く離れた西域の葡萄の木のようにでもある。詳しいことはまだわからない。

④補注 「蒲萄之樹」について

呉兆宜は「未詳」とするが、対を為す「芍薬之花」に「芍薬花頌」と「宛転歌」を注に引いているため、典故となる詩文の存在を考えていたと思われる。「未詳」とは、具体的な詩文を引くに至らなかったものであろう。新釈漢文大系の「語釈」は、「鍾露昇氏は前涼の張洪茂の『葡萄酒の賦』としている」と記し、中国の古典の「注」は、「一説に『蒲萄の樹』は前涼の張洪茂の「葡萄酒賦」とする。」と記している。四庫全書本『十六国春秋』（巻75）に引く「前涼録」の「張斌」に「張斌一作賦文字洪茂、燉煌人也。作葡萄酒賦、文致甚美」とある。「蒲萄」は不詳。「萄」は「萄」の訛誤か。また、福井佳夫「徐陵『玉台新詠序』の文章について（附札記）」は、許逸民『徐陵州校箋』を引いて『寧止蒲萄之樹』句は魏の鍾会がかいた『蒲萄賦』（『芸文類聚』巻八七）の類のことを

暗にさすのだと註している」とする。いずれも「芍薬之花」及び「蒲萄之樹」が、詩文を踏まえていることを指摘する。

福井氏は、この部分を以下のように図示する。

清文満篋、非惟芍薬之花 ①

新製連篇、寧止蒲萄之樹 ②

新製連篇、寧止蒲萄之樹 ③

万年公主、非無累徳之辞 ④

※①～④の番号は、各句の順番を示すために後から加えた。

※④の「累」は、原文ママ。

四六文（駢儷文）のこれら8句は、①と②、③と④がそれぞれ対句を構成し、同時に、①・②と③・④が構文上で対関係を構成する。「花・樹」と「作・辞」の対関係において、「作・辞」がともに具体的な詩文を表す一方で、先に示した諸訳注では、対をなす「花・樹」も具体的な詩文を踏まえると解釈する。この点について、①・②と③・④の対関係をより際立たせる観点から、以下の解釈を可能性として提示したい。

詩文の才能〔清〕＋譬喩〔芍薬之花〕①

詩文の才能〔新〕＋譬喩〔蒲萄之樹〕②

詩文の題材〔重陽〕＋作品〔陸機・文賦〕③

詩文の題材〔万年公主〕＋作品〔左芬・誄〕④

「典故を好んで用いる」ことは駢儷文の条件の一つ（『中国語学新辞典』光生館1979）であるため、

「芍薬」と「蒲（葡）萄」の典故となり得る詩文を調べてみる。

先ず、「芍薬之花」であるが、『玉台新詠』以前の詩文における用例は「玉台新詠序」以外の用例として『毛詩』（鄭風「溱洧」）の「維士与女、伊其相諠、贈之以芍薬」、江文通「別賦」（『文選』巻16）の「下有芍薬之詩、佳人之歌」、吳兆宜の引く「傳統妻芍薬花頌」（『芸文類聚』巻81）、やはり『芸文類聚』（巻81）に載せる「宋王徽芍薬華賦」、また『漢魏六朝百三家集』（巻95）に載せる「梁王筠集題詞」に失われた「芍薬賦」について言及があるのみである。江文通「別賦」および「傳統妻芍薬花頌」は、ともに『毛詩』（鄭風「溱洧」）に言及し、「芍薬之花」に関して先ず想起される詩文は『毛詩』であった。とはいえ、経書の解釈の主眼は「諷諫」にあり、宮女の詩文の才をたとえるには違和感が残る。草本の芍薬は、木本の牡丹とは異なり、枝分かれすることなく茎の先端に花をつける。この単純な形状が、ツルを延ばし多くの房をつける「蒲（葡）萄」の複雑な形状と対比されたと考える。

一方の「蒲萄之樹」だが、「芍薬」の用例が『玉台新詠』に見えないのに対して6例を見出せる。先に引いた『史記』からも明らかなように、「蒲（葡）萄」は「西域」のイメージを喚起する植物として早くから知られていた。例えば沈約「雜曲三首 其二有所思」（『玉台新詠』巻5）に「昆明当欲満、蒲萄応作花」とあり、西域に出征中の男が長安に咲く蒲萄の花を詠むことで、思う女性との隔絶を表現している。また、「蒲（葡）萄」は装飾としても用いられていた。何思澄「南苑逢美人」（『玉台新詠』巻6）に「風捲蒲萄帯、日照石榴裙」、鮑照「行路難四首 其三」（『玉台新詠』巻9）に「七彩芙蓉之羽帳、九華蒲萄之錦衾」とある。『玉台新詠』所収のもの以外では、梁元帝蕭繹「古意」（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩巻25）に「樽中石榴酒、機上蒲萄紋」とあり、いずれ装飾文様としての「蒲（葡）萄」に言及する。

ツル性の低木で鈴なりの果実を実らせる「蒲（葡）萄」は、「西域」という異国情緒を喚起する文様として、宮女たちの周囲を飾っていた。

以上により、「芍薬之花」はその枝分かれしない形状から「清」（＝無駄がない）の譬喩、又「歩道之樹」はその「西域」のイメージから「新」（＝中国にはない新鮮さ）の譬喩として、構文上の対関係を際立たせる表現として機能しており、敢えて詩文に出典を求める必要はないと考える。

①原文

九日登高、時^①有縁情之作；万年公主、非無誄^②之辞。魏文帝与鍾繇九日送菊書：九為陽数、而日月並応。俗嘉其名、以為宜於長久、故以享宴高会。陸機文賦。詩縁情而綺靡。晋書：武帝左貴嬪、諱芬、思之妹也。少好学、善綴文、名垂於思。常作菊花頌曰、英英麗質、稟氣靈和。春茂翠葉、秋輝金華。及帝女万年公主薨、帝痛悼不已、詔芬為誄。

②語釈

- 「九日」…九月九日の重陽節。
- 「登高」…小高い丘に登る。重陽節における習慣の一つ。『荊楚歲時記』に「九月九日、汝南当有大災厄、急令華人縫囊、盛茱萸繫臂上、登山飲菊酒、此禍可消」とある。
- 「時」…しばしば。
- 「縁情之作」…陸機「文賦」（『六臣註文選』巻17）に、「詩縁情而綺靡、賦体物而瀏亮」とある。李善注に「詩以言志、故曰縁情」とあり、李周翰の注に「詩言志故縁情」とある。
- 「万年公主」…西晋初代皇帝の武帝司馬炎（236～290）の娘。
- 「非無」…二重否定による強い肯定。前の「時^①有」に対応する。
- 「誄」…死者を祀る文。『徐孝穆集箋注』も「誄」

に作り、注は無い。『玉臺新詠箋注』は「累」に作り「一作誄」の注を加える。新釈漢文大系は「累」を文字通りに解釈して、早逝した左芬のために「万年公主に詔して誄（哀悼文）を作らせ、その生前の徳行を偲ばれた」と訳すが、以下で言及する『晋書』の左貴嬪伝と矛盾する。中国の古典及び前掲福井氏論文は、それぞれ「左芬の『万年公主の誄』のような徳の高い名文」、「万年公主のごとき貴人の逝去にあたっては、[左芬のように] 婦徳をつらねた誄もかけなくはない」と訳している。

- 「魏文帝」…三国魏の初代皇帝文帝曹丕(187～226)。
- 「与鍾繇九日送菊書」…『芸文類聚』(巻4「歳時中 九月九日」)、『初学記』(巻4)及び『北堂書鈔』(巻155)は「与鍾繇書」として、『全晋文』(巻7)および『太平御覧』(巻32)は「九日与鍾繇書」として所収する。文字異同無し。
- 「陽数」…奇数。対して偶数は「陰数」と呼ばれた。
- 「高会」…盛大な宴会。『史記』巻7「項羽本紀」に「漢皆已入彭城、収其貨宝美人、日置酒高会」とある。
- 「陸機」…陸機(261～303)は西晋の文人で、前出陸雲の兄。
- 「文賦」…前出。引用部分に文字異同は無い。
- 「綺靡」…華やかで美しい様。
- 「晋書」…南朝晋の一代史。唐・房玄齡らが編纂した。二十四史の一つ。「左貴嬪伝」(巻31)に「左貴嬪名芬、兄思、別有伝。芬少好学、善綴文、名垂于思」とある。下線部は引用文との文字異同の箇所を示す。「兄思」を「思之妹也」に改める等、改編が加えられている。詳細は「菊花頌」の語釈を参照。
- 「武帝左貴嬪」…西晋初代皇帝の武帝司馬炎の側室、左芬(蔡)。「貴嬪」は、天子の妃の称号の一つ。なお、1930年に河南省で出土した墓碑には「左蔡(中略)晋武帝貴人也」と記される(中国政法

大学中華法制文明虚擬博物館公式サイト「法制文物專題」より)。

- 「思」…西晋の詩人、左思(250?～305?)。前出の左芬(蔡)は妹。
- 「菊花頌」…『晋書』の「左貴嬪伝」に「常作菊花頌曰、英英麗質……秋輝金華」の記述は無い。『太平御覧』(巻86「嬪」)に「左貴嬪集有離思賦(中略)芍薬華頌、郁金頌、菊花頌」とあり、左貴嬪に「菊花頌」の作があったことを確認できる。また、『初学記』(巻27)は「左九嬪菊花頌曰」として、「英英麗質……秋輝金華」部分を載せる。なお、『芸文類聚』(巻81「菊」)は「晋傳統妻菊花頌曰」として「英英麗質……秋輝金華」部分を載せている。
- 「乃帝女万年公主」以下は『晋書』に同じであることから、「菊花頌」に関わる記述は、呉兆宜が意図的に挿入したものと考えられる。
- 「稟氣靈和」…靈妙な和合の氣を授かる。郭璞「江賦」(『六臣註文選』巻12)に「稟元氣於靈和」とあり、劉良の注に「靈和、和之氣也」とある。
- 「秋輝金華」…秋には黄金の花を輝かす。「金」は五行の一つで、季節では秋を表す。

③通釈

重陽節に高い丘に登っては、陸機の「文賦」に言う情感に基づく作品をしばしば作り、万年公主の薨去に際しては、左芬の誄(あるテキストでは「累」に作る)のような公主の徳を祀る名文を作らないことはない。魏文帝の「鍾繇のために九日に菊を送るの書」に、「九は陽数で、しかも日と月で「九」が並び応じている。世間はその名を喜び、延寿に相応しいと考え、そこで盛大な宴会を催した」とある。陸機の「文賦」に、「詩は情に基づいて華やかで美しい」とある。『晋書』に、「武帝の左貴嬪は、諱を芬といい、左思の妹である。若い頃から学門を好み、文章に巧みで、その名声は兄の左思に次ぐものだった。

いつも「菊花頌」を作っては、「卓越した生まれながらの麗しい性質は、靈妙な和合の気を天から授かったもの。春には翠の葉を茂らせ、秋には金色の華を輝かせる」と謳った。武帝の娘である万年公主が亡くなると、武帝は悼み悲しみ続け、左芬に命じて死者を祀る文を作らせた」とある。

①原文

其佳麗也如彼、其才情也如此。

②語釈

- 「佳麗」…容貌の美しさ。以下の「才情」と対をなす。
- 「也」…ここでは主語を提示する助詞。「や」と訓読し、係助詞「は」に相当する。
- 「彼」…前に示された宮女たちの美貌を説明する部分（至若寵聞長樂～無対無双者也）を指す。
- 「此」宮女たちの才能を説明する部分（加以天情開朗～非無誅徳之辞）を指す。

③通釈

その容貌の美しさは前に述べたようであり、その情感溢れる詩文の才能はこのようなのである。

（以上、鎌田）

（以下、続く）